

包みの美を語る—— 包みの旅

紙工芸家
エキグチ・クニオ

このごろは、色々の国の人が日本を訪れ、また、日本からも本当に色々の国へ旅行する若者が多くなった。私の青春時代とは隔世の感がある。情報化時代で、世界のすみずみのことまで手に取るように分かるつもりになっているが、直にその国の文化に触れてみるとやはり自国との意識の差に戸惑いを覚え、国家や民族の違いを再認識させられる。私たちは他の国の異なった習慣に驚いたり、反発したり、そしてその魅力にとりつかれてしまうこともある。

古来から、日本の文化は中国やヨーロッパ、その他多くの国々の外来文化を非常に巧く消化して作られたものといえる。古書の中にフランスやポルトガルから輸入した石鹸のことを「唐シャボン」と呼んでいるのが見受けられる。優れた輸入品は中国から来たものと思われていた時代の話だ。因みに、胡椒・胡麻・胡粉：と、頭に「胡」の字のついたものも中国から輸入されたものといわれていた。^{*}

さて、日本の包みの文化は何処からやって来たのだろうか。やはり、大陸経由（中国・朝鮮）

^{*} 実際はベルシア

アの一角や橋、山などを布で包んでしまい、作品とする。それはショッキングな驚きと、初めてみる美しい世界であるが、日本の包みの哲学とは随分とかけ離れている。

その日本の包みの心も、形として残ってはいないが、今の生活の中で生きているとはいえないのが残念だ。
元来、「包み」は中身を守り、体裁をつくるう目的だけでなく、精神的な「物忌み」の心も大切な要素とされてきた。が、明治の頃より、それ以前に持っていた意味合いは薄れ、包みも形式化してしまった。もともとは「のしあわび」を付けて進物に贈ったことから始まった。「のし」も、本来の意味は忘れられ、「のし紙」のことと理解されている場合も多いようだ。現代では、西洋風のギフト・ラッピングとミックスしたような「のし包み」のデザインも店頭でよく見受けられるようになった。生活の変化に伴って、包みの形も変わることは必然だが、その始まり、「元の心」を忘れないことも大切ではなからうか。

さて、少し私の「包みの旅」についてお話しよう。

誰でも人生の節目というものがある。私も十年一節ごとに転機があった。十七歳で上京し、四年間テラーで小僧生活を学び、二十代で『ひまわり』と『装苑』という雑誌に小さな仕事をいただき、布の手芸を始めた。三十代でラジオの『女性教室』という番組に出演。勿論、

の仏教、儒教などと共に日本に伝えられたものと思う。

伝統的作法での「包み」は、室町時代に形が出来たようだ。三代將軍足利義満の時代（北山文化）に、禅宗、茶道、華道、礼法などが盛んになり、それが八代將軍義政の時代（東山文化）に洗練され、確立されたといわれている。当時、幕府の調理一切を司った大草流のお膳の紙飾りなどが「包み」の始まりと伝えられているが、それ以前に、大陸からの影響が大きかったとも考えられる。包みの作法も、伊勢流、小笠原流、吉良流などによって、江戸時代にかけて芸術といえるまでに高められた。予断だが、吉良流は、現在テレビ放映中の「元祿繚乱」にも登場する、あの吉良上野介義央の流派。吉良家は將軍家の礼法指南として格式ある家柄なのだ。例の忠臣蔵の話で、随分イメージが狂ってしまったふしがある。

さて、「包み」に及ぼした大陸からの影響に話を戻そう。

韓国からやってくる若者にきいてみると、私テレビのない頃で聴取者はテキストを見ながら手芸を勉強するのだから、今から考えると不思議なことだ。この頃は自分の微力が仕事に付いていけず、焦りもあり、盲蛇に怖じずで名人の職人さんを訪ね教えを乞い、クラフトの勉強に励んだ時代だ。四十歳になると外国の人たちとの交流も多くなり若い大学教授の奥さんの紹介で、一年に四十日間アメリカへ包み、ラッピングや書のための料紙の作り方、袋物、紙人形などを教えるに出かけることになった。

初めての旅は、全てが新鮮で、目から鱗の落ちる例えそのものだった。ハワイからスタートして西海岸へ向かうコース。特にハワイでは好奇心をそそるものが多かった。仕事の合間をぬって、ラパラパの巻き方やレイの作り方などを勉強する。2度目の訪問の際には、植物だけで結婚式やパーティーの装飾をする青年と出会い、早速交換勉強。彼が一番興味を持ったのは笹舟だった。今頃、バナナの葉っぱで笹舟を作り、フルーツを盛りつけているかもしれない。アメリカでは和服で通した。白緋の上品に黒の紗の羽織を掛け、白足袋をはけば、西洋のタキシードにひけをとらないのだ。民俗衣装の伝統の強さだろう。色々な集まりで、のし包みや風呂敷包みのデモンストレーションを頼まれるが、手持ちの半紙やナフキンペーパーなどを配って易しい金包みなどを皆で稽古すると、なかなか楽しく、会場に一度に花が咲いた。日本では、昔はどこの家でも半紙はいつも用意され

たちが学んだ室町時代のことと、彼らが学んだ、それと同時代の朝鮮の話に随分つじつまの合うことがあって面白い。韓国の博物館にある当時の伝統料理の飾りや紋紗などを見ると、日本の製斗包みへの流れがよく理解できる。

現代の中国や朝鮮の一般生活の中には、贈る作法や包みの形は見られない。それは、日本の伝統的折り、包みの中に見出されるのみになっていた。そうした意味でも日本の風土によつて作り上げられた包みの形には限りなく大きな意味と深い心が含まれているというわけだ。

夜空の星を眺めていると、無限の世界に包まれてしまう。そうした感覚から、指先で捻り包むこよりに至るまで、それは、仏典に学ぶ心地さえする。小さな包みの中に宇宙を包み込む：包む心は日本文化の基調なのだ。「包み」は、日本文化を理解する上で大切な営みと深く思う。これと対照的な欧米の「包み」に目を向けるとまず、アメリカの建築構造デザイナー、リチャード・バックミンスター・フラー（一八九五〜一九八三）が思い浮かぶ。彼は最大容積を最小被覆面積で包む球面内接多面体（正三角形を組み合わせていくことによって創造する）を構造体として組み立てるアイデアを発し、巨大なドームで街どころか地球をも包み込む未来都市の姿を提案し、有名である。現代では、日本でもデモンストレーションを行った包みのアーティスト、クリストがいる。彼はカリフォルニ

アで、お返しに包み紙、お菓子の敷き紙などに利用した。外国にいくところとした日本の習慣がゆかしく、懐かしく感じられる。

数年前から、韓国・タイ・インドネシア・台湾を訪問する機会を得た。子供の頃、本測に並んだ本の中に柳宗悦の主宰する『民芸』という雑誌があつて、朝鮮美術がたくさん紹介されていたこともあつて、韓国でも興味深い体験をしたし、インドネシアでは赤ちゃんを布でくるんだり、腰巻きを巻いたり、ここにも包みの文化が息づいていた。それぞれの国で、包み技術の交換ばかりでなくスラング（俗語）の交換勉強までさせてもらう。

インドネシアの若者と、出かけた夜の街には、私のワークショップに集まってきた資沢な人たちと天と地ほど違う生活があつた。手も足も無くした、だるまのような子供が物乞いをしていたり、子供を連れて春を売っている女性、壊れかかった屋台に集まっているホームレスの少年たち……。私の頭の中に日本の敗戦間もない東京で蠢いていた自分が蘇った。あのころの日本人は貧しい中にも明るさがあつた。夜空も美しかった。ここも同じに見えた。笑いかけると皆が微笑んだ。今、我が家で虫の音を聞きながら旅の思い出を綴っていると、小さな小さな自分の人生に思いを寄せ、多くの人々の幸せを願わないではいられない。

旅であつた人々の温かさに私は包まれていく。